

授業分析力の育成を目指す生活科教育に関する授業の開発

——「教材の研究と開発（生活）」を事例として——

西村 豊*・三田 幸司**

Developing of Life and Environment Education for Class Analysis Skills:
A Case Study of “Research and Development of Educational Materials (Life and Environment)”

Yutaka NISHIMURA* and Koji SANDA**

1. 問題の所在

本研究の目的は、教師志望学生の生活科における授業分析力の育成を目指す生活科教育に関する大学の授業を開発することである。

大学の教職課程の授業においては、学習指導案の作成や模擬授業を繰り返し行っていくことを通して、授業の開発力や実践力の形成を目指していくのが一般的であろう⁽¹⁾。実際に、教職課程を担当する教師教育者は、学習指導案の作成や模擬授業に対する効果的な指導法を開発することを目的として、自己の授業実践を対象とした研究に取り組んでいる。例えば、学習指導案の作成に関しては、教師志望学生に授業をより詳細かつ鮮明にイメージさせるために、ストップモーション方式によって学習指導案を書かせる指導法が提案されている（熊田、2024）。また、模擬授業に関しては、他者が作成した学習指導案を用いて模擬授業を行うという教科教育法における模擬授業実施モデルが提案され、さらにその有効性についても示された（佐久間、2024）。これらの上記の研究に代表されるように、教師志望学生の授業の開発力や実践力の形成のために、学習指導案の作成や模擬授業に関する指導法が提案され、教職課程の授業は質的に向上してきていると言えよう。

その一方で、これまで、授業の開発力や実践力を身につけるだけでなく授業分析力を育成することの重要性も指摘されてきた（米田・堤・岡、2022）。例えば、岡田・草原（2013）は、

授業分析力を育成することは、授業づくりの視点や良い授業の条件を持続的に意識させる効果をもつとし、教師志望学生の授業開発力や実践力の基盤になると述べる。このような重要性が指摘されつつも、授業分析力の育成に関する研究は、教育実習に向けた即効性のある事前指導にはならないと認識されているからか（岡田・草原、2013）、学習指導案の作成や模擬授業に関する研究に比べその蓄積は少ない。さらに生活科教育の分野に着目した場合、このような研究はほとんど存在していない。ただ、授業分析力が授業開発力や実践力の基盤となるという指摘（岡田・草原、2013）に鑑みれば、生活科における授業分析力を育成するための方略を考えることは喫緊の課題であると言えよう。

以上の理由から、筆者らは、授業分析力を育成する生活科教育に関する大学の授業の開発に取り組むこととした。検討にあたっては、筆者らが担当する「教材の研究と開発（生活）」を事例とする。授業開発を行なう前提として、次のような仮説を設定した。

生活科教育学の知見を参考に授業開発の際に必要な要件を抽出し、その要件を視点として生活科授業を分析する。その上で、生活科授業の改善案を検討することで、生活科の授業開発力・実践力の基盤となる授業分析力を育成することができる。

なお、本研究では、生活科における授業分析力を「生活科授業やその学習指導案、授業記録を観察・分析し、その良さや課題を評価することができる力」と定義する。

* 本学講師

** 本学准教授

表1 2024年度「教材の研究と開発（生活）」の概要

回	内容
1回	ガイダンス／「深い学び」としての生活科授業の構成要件
2回	「学校、家庭、地域の生活に関する内容」の授業事例の分析①
3回	「学校、家庭、地域の生活に関する内容」の授業事例の改善案の検討①
4回	「学校、家庭、地域の生活に関する内容」の授業事例の分析②
5回	「学校、家庭、地域の生活に関する内容」の授業事例の改善案の検討②
6回	「身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容」の授業事例の分析①
7回	「身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容」の授業事例の改善案の検討①
8回	「身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容」の授業事例の分析②
9回	「身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容」の授業事例の改善案の検討②
10回	「自分自身の生活や成長に関する内容」の授業事例の分析
11回	「自分自身の生活や成長に関する内容」の授業事例の改善案の検討
12回	生活科の授業開発演習①
13回	生活科の授業開発演習②
14回	生活科の授業開発演習③
15回	生活科の授業開発演習④／ふりかえり

(2024年度「教材の研究と開発（生活）」のシラバスをもとに筆者作成)

2. 研究の方法

本研究は次の手順で進めていく。まず3で、生活科の授業開発力・実践力の基盤となる授業分析力の育成をねらいとした「教材の研究と開発（生活）」の全体構成の論理と各回の授業について説明する。次に4で、授業のなかで使用した一枚ポートフォリオの記述内容をもとに、教師志望学生の授業分析の視点を析出することを試みる。最後に5で、本研究の成果と課題を述べる。

なお、本研究において取り上げる一枚ポートフォリオへの記述内容については、「教材の開発と研究（生活）」の履修者に研究の趣旨を説明し、匿名の上で公開の許諾を得た。

3. 授業分析力の育成を目指した「教材の研究と開発（生活）」の開発

(1) 授業実践の文脈

「教材の研究と開発（生活）」は、小学校生活科に関する専門的事項、並びにその指導法について複合的に取り扱う教職選択必修科目である。2年生で履修した「教科の学び（生活）」と「生活科教育法」の学修を基盤として発展的な内容を取り扱う授業である。本授業の対象は3年生で、2024年度の履修者は24名である。履修者は初等教育専攻児童教育コースに所属し小学校教員を志す教師志望学生である。「教材の研究と開

発（生活）」は、社会科教育学を専門とする西村と、理科教育学を専門とする三田とで分担している。西村は、「深い学びとしての生活科授業の構成要件」と「授業分析と改善案の検討」の回を担当している。三田は、「授業分析と改善案の検討」の一部と「生活科の授業開発演習」を担当している。なお、授業の導入的な位置づけとなる第1回については西村と三田の2人で担当した。上記の表1は、「教材の研究と開発（生活）」の概要である。

(2) 「教材の研究と開発（生活）」の全体構成の論理

「教材の研究と開発（生活）」は、生活科教育学の知見を参考に授業開発の際に必要な要件を抽出し、その要件を視点として生活科授業の分析を行い、生活科授業を開発するとう論理となる。そのため、「教材の研究と開発（生活）」は、15回の授業を表2に示したような3つの次元で構成されることとなる。

表2 全体構成の論理

次元	内容
次元Ⅰ	生活科授業を分析するための視点の獲得
次元Ⅱ	獲得した視点に基づく生活科授業の分析、改善案の検討
次元Ⅲ	授業改善案に基づく生活科学習指導案の開発

(筆者作成)

1) 次元Ⅰ（生活科授業を分析するための視点の獲得）

次元Ⅰでは、生活科授業を分析するための視点を獲得する学修を行う。具体的には、岡崎（2020）によって示された図1のような生活科授業における「深い学び」の構成要件」を提示し、その仕組みについて解説する。これにより、教師志望学生は、生活科授業における「深い学び」の構成要件」を、生活科授業を分析するための視点として捉えていく。なお、表1の第1回がこの次元に該当する。

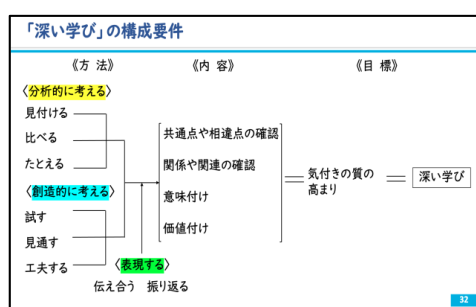


図1 「深い学び」の構成要件に関する授業スライド（岡崎（2020）を参考に筆者作成）

2) 次元Ⅱ（獲得した視点に基づく生活科授業の分析、改善案の検討）

次元Ⅱでは、次元Ⅰの学修で獲得した視点に基づいて生活科授業の分析を行い、その授業の改善案を検討する学修を行う。表1の第2回から第11回までがこの次元に該当する。なお、次元Ⅱの学修段階は表3のようになる。

表3 次元Ⅱの学修段階

学修段階	内容
学修段階①	指導案、実践記録の把握
学修段階②	「深い学び」の構成要件の視点に基づく分析
学修段階③	分析結果のクロストーク
学修段階④	「深い学び」となるための改善案の検討
学修段階⑤	改善案のクロストーク

（筆者作成）

ここでは、「指導案・実践記録の把握・分析」（学修段階①②③）と「改善案の提案」（学修段階④⑤）によって構成される。第2回・第4回・第6回・第8回・第10回の授業において「指導案・実践記録の把握・分析」を行い、第3回・第5回・第7回・第9回・第11回で「改善案の提案」を行う。第2・3回、第4・5回、第6・7回、第8・9回、第10・11回の授業を一つのまとまりとし、「指導案・実践記録の把握・分析」と「改善案の提案」が関連するようになっている。

まず、「指導案・実践記録の把握・分析」を行う第2回・第4回・第6回・第8回・第10回の授業の構造について述べる。これらの回は学修段階①②③で構成される。学修段階①では、指導案、実践記録を読み込み、その概略を把握していく。ここでは、分析対象となる生活科授業の実際について捉えていく。学修段階②では、「深い学び」の構成要件」の視点から対象となる生活科授業を分析する。ここでは、生活科授業が「深い学び」の構成要件」の視点から捉えた場合どのように評価することができるか考察していく。学修段階③では、分析結果のクロストークを行う。ここでは、分析結果を交流することを通して、教師志望学生の生活科授業に対する見方を広げていく。

次に、「改善案の提案」を行う第3回・第5回・第7回・第9回・第11回の授業の構造について述べる。これらの回は学修段階④⑤で構成される。学修段階④では、「深い学び」となるための改善案を考える学修を行う。ここでは、分析対象の生活科授業の「深い学び」の構成要件」から捉えた場合の課題点に着目し、いかにそれを修正すれば「深い学び」を実現できる授業となるのか検討していく。学修段階⑤では、改善案のクロストークを行う。ここでは、改善案の交流することを通して、教師志望学生の生活科授業の見方を広げていく。

次元Ⅱの第2回から第11回までの授業において、教師志望学生は生活科における「深い学び」を実現する授業のあり方について考察することになる。その際、「深い学び」の構成要件について、授業者からの一方的な説明を受け入れるのではなく、授業分析の視点として活用する。これにより、教師志望学生は「深い学び」の構成要件を主体的に授業分析を行うためのスキルとして内面化することができる。

3) 次元Ⅲ（授業改善案に基づく生活科学学習指導案の開発）

次元Ⅲでは、次元Ⅰ・Ⅱの学修を踏まえて生活科の学習指導案を作成する学修を行う。生活科の学習指導案を作成するにあたり、改善案をベースにして「深い学び」の構成要件を満たしたものとなるように意識させる。なお、表1の第12回から第15回までがこの次元に該当する。

以上のようなⅠ・Ⅱ・Ⅲの次元によって「教材の研究と開発（生活）」を構成することで、教師志望学生は生活科教育学の知見を授業分析のための視点として内面化し、生活科授業の開発力・実践力の基盤となる授業分析力を高めていくことができると考え授業全体を構想した。

4. 授業分析力の育成を目指した「教材の研究と開発（生活）」の実践の結果

本章では、生活科における授業分析力の育成を目指して開発した「教材の研究と開発（生活）」の実践結果について検討したい。検討にあったのは授業で活用した一枚ポートフォリオの記述内容に着目する。

なお、履修者24名のうち3名の学生を抽出し、その学生の一枚ポートフォリオの記述内容を分析対象とした。

(1) 一枚ポートフォリオの活用

近年、一枚ポートフォリオは、初等、中等の教育現場だけでなく、大学の教職課程に関係する授業においても積極的に導入が図られ、児童、生徒、学生の力量形成に役立つツールとしてその活用が実践的に検討されている（谷口、2020；馬場、2018；福谷；皆川、2018）。このような一枚ポートフォリオの特徴は、教師のねらいとする学習の成果を、学習者が一枚のシートの中に、学習前・学習中・学習後の履歴として記録していくところにある（堀、2002）。なお、学習前と学習後で「本質的な問い」を提示し回答させるようになっている。そのため、「本質的な問い」に対する回答の変容に着目することで学習者の自己評価が可能となる。

筆者らも教師志望学生の学びの履歴を可視化でき、自己評価を可能とする点に注目し、「教材の研究と開発（生活）」において、一枚ポートフォリオを活用し授業を展開することを試みた。

まず、「教材の研究と開発（生活）」の第1回

において本授業の「本質的な問い」である「生活科の授業において「深い学び」を実現するためにはどのようなことに留意して授業を開発・実践する必要があるか」を教師志望学生に提示し、その回答を記述させた（図2）。

【授業での学びを始める前に】

あなたは、生活科の授業において「深い学び」を実現するためにはどのようなことに留意して授業を開発・実践する必要があると思いますか。自分の考えを書いてください。

図2 一枚ポートフォリオの一部

次に、第2回から15回までの授業において、毎回の授業のタイトルと「授業を通して学んだこと、一番大切だと考えたこと」を記述させた（図3）。

授業のタイトル	授業を通して学んだこと、一番大切だと考えたこと	教員確認
①4/11		
②4/18		
③4/25		
④5/9		
⑤5/16		
⑥5/23		
⑦5/30		

図3 一枚ポートフォリオの一部

そして最後に、「本質的な問い」を再度示し記述させた（図4）。

「教材の研究と開発（生活）」では、教師志望学生に学修前後の「本質的な問い」に対する記述内容に着目させ、授業に対する自己評価を行わせた。これにより、授業を通して自分自身の生活科授業の捉え方がどのように変容したかをメタ的に認識させた。

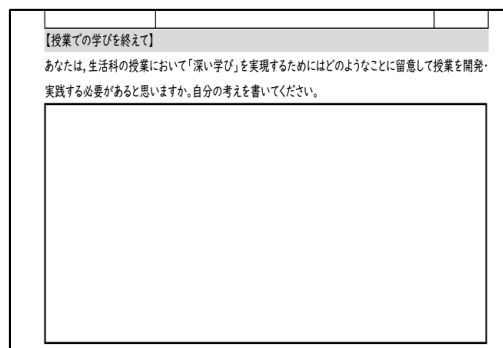


図4 一枚ポートフォリオの一部

ただし、本研究では生活科における授業分析力の育成を目的とした授業開発を主な目的としている。そのため、一枚ポートフォリオを活用した教師志望学生の自己評価については別の機会に論じることとする。今回は学修前後に提示した「本質的な問い」に対する記述内容に着目し、本授業を通して生活科授業の開発力・実践力の基盤となる授業分析力がいかに育成されたのか析出した。

(2) 教師志望学生の「本質的な問い」への記述内容にみる授業分析力

本節では、抽出学生A・B・Cの記述内容とその特徴について確認していく⁽²⁾。

1) 抽出学生A

学生Aは、「本質的な問い」に対して学修前には図5のように回答した。「活動する場面を多く取り入れ、子どもの意欲が湧く」ように生活科授業を構成することが大切だと捉えた。

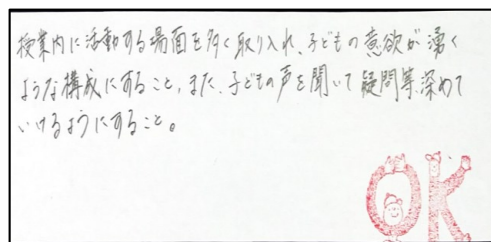


図5 学生Aの学修前の「本質的な問い」に対する記述

学修後には図6のように回答した。学生Aは学修前に持っていた「活動する場面を多く取り入れ子どもの意欲が湧く」授業構成が望ましいという見方を維持しつつも、「[深い学び]」の構成要件を確認しながら先行実践を見ていくことで、「深い学び」の実現には子どもが自分たちな

りに考えて身近なものについて学んでいく」ように授業を構成することが大切だと捉えた。しかし、生活科授業の分析視点であった「[深い学び]」の構成要件を満たすことが全てではない」とし、「目標達成のために子どもが自ら考えることができていたら深い学び」となるとも捉えた。

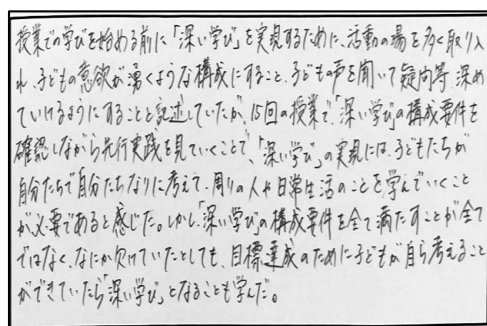


図6 学生Aの学修後の「本質的な問い」に対する記述

学生Aは、学修前から持っていた「活動場面を多く取り入れる」という生活科授業の分析視点を維持しつつ、学修を通じて「深い学び」の構成要件を満たすことや、子どもが自ら考えることの重要性についても、「深い学び」を実現する生活科授業に求められる要素として指摘するようになった。

2) 抽出学生B

学生Bは、「本質的な問い」に対して学修前には図7のように回答した。学生Bは、「児童が新たな発想や発見を生み出せるような創造的な活動を行う」ことや「活動することを目的とするのではなく、活動の結果、得られるものを考えて授業を組み立てる」こと、「様々な人と対話、交流して児童自身の見識を広げられるようにする」ことが生活科授業には大切であると捉えた。

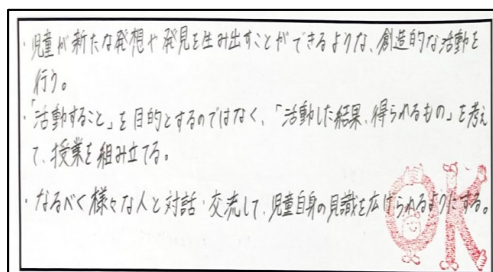


図7 学生Bの学修前の「本質的な問い」に対する記述

学修後、学生 B は図 8 のように回答した。学生 B は、「教師がねらいをもって授業を構成することが重要だ」とした。そのためには、教師が「どのような力を伸ばしたいか」を明確に考え、それを達成するための手立てを構築する必要があると述べた。また、「深い学び」を実現するためには「気づきの質」を高めることが重要であり、「子ども自らが発想し、試し、修正する」といった主体的な学びが大切であると捉えた。

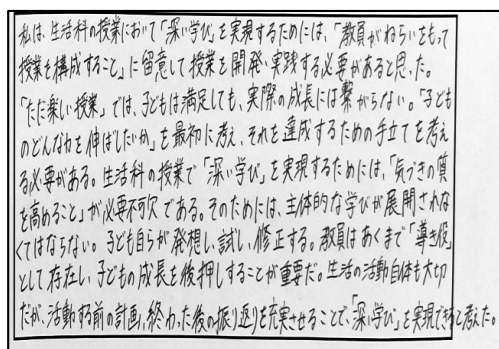


図 8 学生 B の学修後の「本質的な問い」に対する記述

学生 B は、学修前から持っていた子ども自らが創造的な活動を行うという生活科授業の分析視点を学修後も維持していた。さらに、学修後には試すや修正を行うこと、気づきの質を高めることの重要性を、生活科授業における「深い学び」の要素として指摘するようになった。また、授業のねらいとそれを実現するための手立ての重要性についても言及するようになった。

3) 抽出学生 C

学生 C は、「本質的な問い」に対して学修前に図 9 のように回答した。学生 C は、「他者の意見と比べ新たな発見ができる場をつくる」「体験的な活動を取り入れ児童が五感をつかって学べる場をつくる」ことが大切であると捉えた。

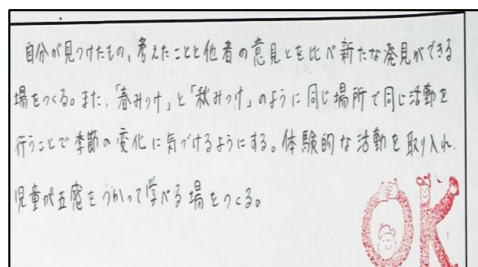


図 9 学生 B の学修後の「本質的な問い」に対する記述

学修後、学生 C は図 10 のように回答した。学生 C は、「分析的に考える」「創造的に考える」「表現する」に留意して授業を開発・実践することの重要性を捉えた。さらに、意味付けや価値付けについては、子どもによって意味や価値が異なることを指摘し、「教師が一方的に意味、価値あるものだと思って活動するのではなく、一人ひとりに合った個別最適な学びにしなければならない」と捉えた。

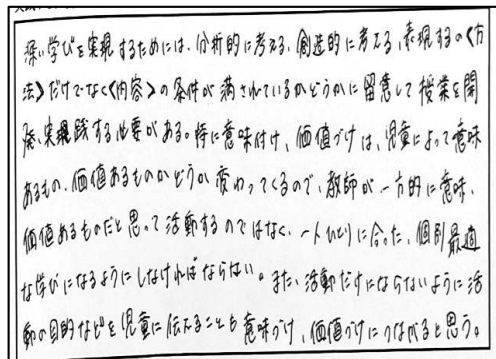


図 10 学生 C の学修後の「本質的な問い」に対する記述

学生 C は、学修前には、他者の意見を比較して新たな発見を得る場や、五感を活用して学べる場を重要視していた。しかし、学修後には、学習内容における意味付けや価値付けの重要性に加え、それらを行う際には一人ひとりに合った個別最適な学びを実現することが、「深い学び」としての生活科授業に求められる要素であると指摘した。

以上のことから、3名の抽出学生はいずれも、授業開発・実践の基盤となる授業分析のための視点を深めたことが理解できよう。岡崎（2020）の知見による「『深い学び』の構成要件」を意識した視点を基盤としていた。また、「教材の研究と開発（生活）」の授業以外で学び得た知見を活用した視点も確認することができた。

5. おわりに

本研究では、教師志望学生の生活科における授業分析力の育成を目指す生活科教育に関する大学の授業を開発することを目的とした。最後に本研究の成果と課題について述べたい。

本研究の成果は2つある。1つは、生活科授業における授業分析力に焦点を当てて、その育成を目指す生活科教育に関する大学の授業の論

理について考察し、その論理に基づいた「教材の研究と開発（生活）」を開発することができた点である。2つは、開発した授業を実践し、冒頭の仮説の有効性について示すことができた点である。具体的には、学生の一枚ポートフォリオの検討を通して、岡崎（2020）の知見に基づいて設定した「深い学び」の構成要件」を踏まえて生活科授業を評価するような記述を確認できた。以上のことから、今回提案した「教材の研究と開発（生活）」の授業構成によって、教師志望学生は「深い学び」の構成要件」を内面化させ、生活科授業の分析視点として獲得できることを示した。もちろん、教師志望学生は本授業以外で学んだことも踏まえて生活科授業の分析視点を構築していたことも付記しておきたい⁽³⁾。

一方で、本研究の課題は2つある。1つは、本研究では、授業分析力の育成を目指す大学の授業の開発に主眼を置いていたため、教師志望学生の授業分析力が授業開発力や実践力にどのような影響を及ぼしたのかについては未解明であった。この点については、「教材の研究と開発（生活）」の授業開発演習において教師志望学生が作成した学習指導案を分析することを通して明らかにする必要がある。2つは、本研究では、岡崎（2020）の知見を参考に生活科授業の分析のための枠組みを設定したが、この分析のための枠組みが変われば育成される授業分析力も異なってくることが予想されるだろう。よって、他の生活科教育学研究の知見なども踏まえ生活科授業の分析するための枠組みを発展させていく必要がある。

これらの課題については、今後、取り組んでいきたいと考えている。

註

- (1) 筆者らが勤務する広島文教大学においても学習指導案の作成や模擬授業の実践を主たる目的とした授業はすでに多く設定されている。しかし、授業分析力の育成を目的とした授業はそう多くないのが現状である。
- (2) 本論文では、抽出学生の一枚ポートフォリオの記述をそのまま掲載している。4章2節の本部中の「」で示している文は、抽出学生の記述内容をそのまま抜き出していることを示している。
- (3) 例えば、抽出学生Bが言及している目標設定にお

ける「ねらいと手立て」の重要性については、他の授業において説明されていたことである。学生Bは、他の授業で学び得たことを「教材の研究と開発（生活）」における授業分析に応用している。

参考文献

- 岡崎誠司（2020）「「深い学び」を実現する生活科の授業構成—第1学年単元「あきのたからものであそぼう」の場合—」『富山大学人間発達科学部紀要』第15巻第1号、pp. 33–40。
- 岡田了祐・草原和博（2013）「教員志望学生にみる社会科授業分析力の向上とその効果—社会系（地理歴史）教科指導法の受講生を手がかりに—」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部、第62号、pp. 61–70。
- 熊田亘（2024）「再現性の高い学習指導案を書く」『明治大学教職課程年報』第46巻、pp. 81–89。
- 佐久間敦史（2024）「教科教育法における模擬授業実施モデルに関する一考察—他者が作成した学習指導案を活用して—」『大阪教育大学紀要 総合教育科学』第72巻、pp. 17–34。
- 谷口雄一（2020）「教育思想史による教職課程学生の教育観の形成のあり方」『摂南大学教育学研究』第16号、pp. 1–10。
- 馬場敦義（2018）「楽しみながら理科を追究する子どもたち—イメージ図、一枚ポートフォリオの活用により—」『和歌山大学教育学部附属小学校紀要』第41号、pp. 70–73。
- 福谷泰斗・皆川直凡（2018）「思考力・判断力・表現力を育む中学校社会科授業の実践とその評価—説明活動と一枚ポートフォリオによる知識の統合と活用—」『鳴門教育大学授業実践研究—学部・大学院の授業改善をめざして—』第17号、pp. 101–108。
- 堀哲夫（2002）「一枚ポートフォリオ評価の理論」堀哲雄、進藤聡彦編『一枚ポートフォリオ評価中学校』日本標準、pp. 233–248。
- 米田重和・堤公一・岡陽子（2022）「教職大学院生の「授業分析力」育成のための授業開発に関する事例研究」『佐賀大学大学院学校教育研究科紀要』第6巻、pp. 101–108。

付記

本論文は、2024年8月29日に広島文教大学で開催された「令和6年度夏期FD・SD研修会」において西村豊が発表した「学生が主体的に学び、「授業」の分析・開発力を高めるにはいかに「授業」をすべきか?—「教材の研究と開発（生活）」の実践を通して—」の内容を再構成したものである。